

## 小さな願いと大きな夢

—国際協力とあなた自身のコラボ—

武庫川女子大学 1年 原田梨央

### 『この子たちを助けて』

そう思ったのは私が小学生の頃だった。

裸足でゴミの中を歩き回る男の子がテレビが映って、私は強くそう感じた。まだ発展途上国や先進国といった言葉を知らなかった私は、同じくらいの年齢に見えるその男の子があまりにも自分と違う生活をしていることに驚きを隠せなかった。正直なところ、入り口は同情という感情だったかも知れない。いずれにせよ、その日を境に募金箱を見つけた時には必ず募金をし、もしも宝くじが当たったらというような質問には貧しい子供たちに寄付したいと答えるようになっていた。大きくなるにつれて、自分の気持ちを周りの人に笑われたり、偽善者だと言われる機会が増え、募金などの一時的な支援こそが発展途上国の自立を妨げているのかも知れないと不安を感じるようになった。「貧しいから食べられない、貧しいから学べない」その不平等をなくしたい、小さい頃に私が感じたたった1つの願いはとてつもなく大きな夢になっていた。

そんな時、私が興味を持ったのは化学という学問である。

化学を駆使できれば水も綺麗にできるし、感染症などの病気も治せる。自分が好きな学問で自分の夢だけでなく他人の夢も叶えられるとしたら、こんなに素敵なお仕事はない。ここから私は化学の力で貧しい国の子供たちを救いたいと切望することになる。もちろん現実には厳しい。受験に失敗したり、新薬を開発する上での様々な問題点を知って、自分には到底変えられないかも知れないと無力さを感じることも何度もあった。

それでも大学入学と同時に入った学生国際協力団体でインドの子供たちが純粋に勉強したいと願う姿や苦しい生活を送っているにもかかわらず医者になって他人を助けてみたいと願う姿を見て、それまで以上に国際協力への意識が高まった。さらに団体として教育支援活動を行っていく中で、感染症にかかって学校に通えなくなっている生徒と出会った。残念ながら、私を化学の道に導いてくれた恩師のような存在は彼らにはなく、感染症にかかったことすら先生が知ったのは1年後のことで、お金がないため治療できず学校にも通えないとのことだった。「理想の薬があればな」本気でそう思った。以前、私が考える理想の薬というテーマでのレポート課題が出された。私は発展途上国の死因の多くを占める感染症がすぐに治せて、さらに貧困層でも手に入る安価な薬について書いた。それは水もろくに飲めない国でぺろっと舐めるだけでも効果を発揮する薬である。そしてその生徒の話聞いた時、理想ではなく現実の薬にしようと思ったのだ。

もちろん、国際協力と何をコラボさせるかを考えるにあたって、SNS やオリンピックなど様々なアイデアが浮

かんできた。しかしながら、大学生である私にもできることがたくさんある中で、最も大切なことは自分自身で気づき、見て、行動することだと感じたのだ。大がかりなことではなく、誰もが自分の好きなこと、やりたいこと、得意なことをほんの少しずつコラボさせられれば彼らの夢は叶うに違いない。  
あなたも自分自身が楽しめることで国際協力とコラボしてみないだろうか？(1,349字)